

1 文献名
『木曾岬小学校創立百年記念誌』
2 学校名
木曾岬小学校
3 災害名
昭和 19 年（1944 年）東南海地震
4 記述の概要
（1）雨や風、地震などの様子
授業も終わり全校生徒が下校してまもなく、激しい揺れと同時に、校舎全体がきしみ出した。職員室から外へ出て、渡り廊下を見ると、屋根は波を打ち、その下は、土ぼこりで先が見えない状態になっていた。（P19）
（2）学校内や地域の被害の状況
先生で手わけして、教室から便所の中まで生徒が残っていないかどうかを探し歩き、幸いにもだれも残ってなく、生徒に人身事故のないことを確認した。（P19）
（3）復旧の様子
（4）体験談
（5）教訓など
（6）その他

1 文献名
『木曾岬小学校創立百年記念誌』
2 学校名
木曾岬小学校
3 災害名
昭和 34 年（1959 年）伊勢湾台風
4 記述の概要
(1) 雨や風、地震などの様子
(2) 学校内や地域の被害の状況
堤防が決壊し、午後 8 時頃全村水没した。住民の死者 328 名、重軽傷者、全壊流失その他多大の被害をこうむり、木曾岬小学校全児童 504 名中 57 名もの死者を出した。講堂は流失し、校舎は大破した。(P10、95) 台風の翌日、学校は湖の中にあるようだったが、潮がなかなか引かずどうすることもできなかった。(P26)
(3) 復旧の様子
10 月 2 日に児童を鈴鹿電通、高田本山へ収容し、共同生活をはじめたが、授業らしきものはできなかった。10 月 17 日、350 名の児童は鈴峰荘に移転し共同生活学習にあたり、97 名の児童は親せきその他へ疎開した。11 月 26 日帰村し、本校において授業を再開した。(P10) 11 月 20 日、村内の排水はほぼ完了した。(P96) 昭和 35 年 12 月、校舎の補修工事が完成した。昭和 36 年 4 月、講堂及び特別教室 3 室、給食室、用務員室などが新築、昭和 37 年 10 月には、体育倉庫、講堂便所を新築した。(P10) 図書室、工作室、理科室、同準備室と 2 階に講堂という配置で校舎が鉄筋コンクリートで建てられた。(P27) 昭和 36 年、中学校の災害復旧工事が完了した。(P96) 家も仮住まいで大変だった。木曾川の堤防の引堤工事が始まって、家を移転することになり、落ち着いた生活はできなかった。(P83)
(4) 体験談
自宅も台風で屋根瓦が飛んで水びたしになり、前の川には満潮ごとに豚の死がいが出てきて、衛生上よくないので、子どもを員弁に預けた。(P26) 伊勢湾台風から 7 年が過ぎても、まだその爪跡が残っていた。校舎 2 階から下へ 3 段目くらいの色が変わっている腰板のところまで「伊勢湾台風の時、水がきた」ことを教えられた。(P33)
(5) 教訓など
(6) その他
完成した講堂に舞台が整備され、伊勢湾台風のため途絶えていた学習発表会が再開された。(P29～30)